

『東方』二八一号より

「登竜門の夢」は

中華民族を押し潰すのか

鈴木 博（翻訳家）

本書は中国作家協会主宰の『中国作家』二〇〇〇年第五号にその全ページを費やして掲載され、ほぼ同時に華夏出版社（北京）から出版された『中国高考報告』の抄訳である。

訳者の「解説」によると、出版直後からセンセーションを巻き起こし、一か月以内に『文匯報』、『北京青年報』、『新華文摘』など三十以上の新聞、雑誌に転載され、『文芸報』、『光明日報』、『中国青年報』などで専門家の意見を交えて特集が組まれ、インターネットの各サイトが競って電子版を掲載し、最終的に百以上のマスメディアに取り上げられ、単行本だけでも二十万部以上売れ、文芸作品として久々のヒット作となり、もつとも少なめに見積もっても一億人以上がなんらかの形でこの作品に触れ、昨年九月現在、テレビの連続報道番組を制作中であるという。

著者の何建明は、江蘇の出身で、第一回と第二回の魯迅文学賞を連続受賞した若手ノンフィクション作家で、現在、前記『中国作家』副編集長、中国報告文学学会常務理事の任にあり、意欲的に創作に取り組んでおり、作品の大半は普通のメディアが取り上げない「陰暗面」を暴露したもので、代表作に「涙は金である」、「共和国の危機」、「科学者の名利」、「山峡の大移民」、「農民の権益を守れ」があり、最新作の「SARSから北京を守れ」も話題になって

何建明著／何曉毅・梁雷訳

『登竜門の夢——知られざる中国大学受験の実態』
四六判・二三六頁・白帝社・一、八九〇円



いるという。

「新世紀初頭、中国政府は十年後、西暦二〇一〇年ごろ、高校卒業生の大学進学率を現在の九パーセントから一五パーセントに引き上げることが目標にすることを宣言した。……それでもこれからの十年間に、一億五千万人の若者の九一パーセントから八五パーセント（つまり一億二千万人以上）は大学に進学できない。……〔ますます激しさを増す進学のための・引用者注〕競争は都会と農村、東部と西部、有名校と普通校、金持ちと貧乏人のあいだなどで繰り広げられ、……今後数十年間、大学進学は依然として中国国民が最も関心を寄せ、中華民族の復興にも大きく影響する一大事である。……大学に入るかどうかは、人生そのものを決定づけてしまうほど、中国人にとって大事なものである。大学に入ることのもつ意味は、中国人にとって重すぎるほど重い。その重さにたくさんの人は押しつぶされ、中華民族まで、押し潰されそうになってきた」（「プロ

▼『東方』281号より

一 「登竜門の夢」は中華民族を押し潰すのか

▲ 鈴木 博

ローグ」以下、評者訳。原文とは必ずしも一致しない」という問題意識のもとに、「自分の足で全国の数十の高校の数え切れない受験生、教師および受験生の保護者から取材し、二年がかりで書き下ろした」（訳者の「解説」）の本書である。

その構成は、

プロローグ

第一章 大学

——中国人の求め続ける夢

第二章 決戦前の戦い

第三章 決戦場見聞録

第四章 場外乱闘

第五章 親たちの戦い

第六章 受験に群がる人々

エピローグ

——やがて貧しい者は大学から閉め出される

で、各章がさらに数項に分かれている。また、訳者が「解説——中国大学入学試験の仕組み」を付すとともに、本文の理解に役立つ多数の訳注を施している。

本書の最大の特徴は、なんといっても八十件余りに及ぶ具体的な事例報告にある。

大学進学率が五〇パーセントちかくに達し、大学が大衆化している日本と異なり、中国は依然として大学がエリート養成機関にとどまっており、「大学に入ることとは人生の分かれ道である。入れなかったら将来永遠に『上流社会』と無関係になることを意味する。最も典型的な例は大卒の証明書がなければ賑やかな『招聘市場』（ホワイトカラーの職業紹介所）に入らず、人気のない、しかも汚い『労務市場』（ブルーカラーの職業紹介所）に行くしかないことだ。

トップページにもどる

この二つの『市場』は二つの違う階級を意味している」と証言しているのは、自分も北京大学の出身で、子どもが北京大学に合格した保護者である（第二章）。

入学者の成績によって教育効率に四、五倍の差が出るというので、ユネスコの援助を受けている北京第四中学のような有名校は別として、普通の中学では優秀な生徒をスカウトするためにさまざまな手段を講ずる。もったもありきたりなのは、定期的に新聞記者を学校に招いて資料を提供するとともに、数十万元を投じて新聞広告で自校の実力を宣伝することであるが、報奨金を出して教師に生徒勧誘のノルマを課す中学さえある。あるいは、「国際学級」を作り、中国語と英語の二言語教育を行うことで、優秀な生徒を集める。そのため、優秀な生徒を奪われた中学の新任の校長は、「いまいばん重要なのは、わが校の大学進学率を上げること。これ以上も、これ以下のこともない」と訓辞している（第二章）。

北京では戒厳が日常茶飯事であり、北京の人びとは戒厳にうんざりしているが、毎年、全国大学入学試験が行われる七月七、八、九日の三日間の「戒厳」は好意的に受け容れられており、この三日間は、北京の全警官が動員され、国賓の訪中もなく、国家主席の自動車さえ道を譲り、中央の幹部や国賓の自動車の隊列で交通渋滞が起こることがなく、自動車のドライバーはクラクションを鳴らしただけで、受験生の保護者に車から引き摺り下ろされ、派出所に突き出されることもある。一方、静かな学習環境を求めて、家族がまるごとホテルに寝泊りする家庭もあり、ホテル側も受験生相手の商売に真剣に取り組み、マッサージや催眠プログラムを用意し、「状元栄養定食」、「状元会席」、「金榜提名宴」など、受験生向けの特別料理まで提供してい

る（一泊三百元前後）。もちろん、科挙の時代からおこなわれてきたさまざまなカンニングも横行している（第三章）。

成績のよくない生徒や宿題をやつてこない生徒に体罰を加える「ヒステリックな教師」、「私は病気じゃない、なぜ入院するの」、「家出しなかったら、私はきつと母を殺したと思う」という「苦闘する受験生の叫び」、北京・上海両地の合格基準が他の地方よりもおよそ一〇〇点も低い「選考制度の歪み」なども具体的に報告されている。

たとえば、その「歪み」の結果、北京では四〇〇点で重点大学に入れるのに、河南では四四九点でも入れず、「一九九八年、重点大学の理工系学部合格ラインは、江蘇省は五六六点で、北京より八三点も高く、湖北省は北京より一〇二点も高かった。文科系では江蘇省は五二九点で、北京より七一点も高かった。この年、北京の受験生で六〇〇点を超えたのは七五九人で、わが江蘇省で六〇〇点を超えたのは北京の十倍ぐらいだった。湖北省にいたつては、八千人もが六〇〇点を超えた。山東省・湖南省なども大勢の受験生が六〇〇点を超えた。しかし、現実には北京・上海の六〇〇点以上取った受験生はほとんど北京大学・清華大学・復旦大学などの重点大学に入ったが、われわれのような省の六二〇点取った受験生は普通の大学にも入れない。……これらの六〇〇点以上取った地方の受験生は、自信満々、北京大学・清華大学などを第一希望とした。しかし、彼らが入れるはずの大学は、彼らより低い点数しか取れなかった北京・上海の学生が入ったせいで、枠がなくなり入れなかった。そして第二志望の大学に入ろうとしたが、いまの大学は殆ど第二志望の学生を取ろうとしない。結局、六〇〇点以上取った地方出身の受験生は大学にすら入れない」

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる ▶

（第四章）。

この不公平さのため、江蘇では毎年一万人以上の若者が大学に入る機会を失つてしまい、北京の大学合格率は七四パーセント、統一試験から独立した上海はもつと高いのに、江蘇・山東・湖南・湖北などは三〇パーセントである。この不公平は入学のときだけでなく、卒業のときにも引き継がれ、地方出身者が北京で就職したければ、四年間死ぬほど努力しなければならないが、北京出身者は四年間遊んでいても北京で就職できる。さらに、替え玉受験があれば、試験を管理する側の不正な操作も少なくない（第四章）。

第六章「受験に群がる人々」では、「参考書出版——金のある木」、「受験塾——教師たちの内職」、「偽造卒業証明書——就職の必須アイテム」、「選考詐欺——冒険家の珍商売」について記している。

前記の北京第四中学は進学塾を開設し、夜間と週末に開講し、正規の生徒に匹敵する数百人の受講者を受け容れているが、それでも希望者の要望に応えきれず、近くの中学と小学校の教室をも借りて開講している。年間受講料は一人六百元から八百元であるが、名門中学のベテラン教師が経営する塾の一時六十六元や、そのような教師の一对一の個人レッスン料に比べれば、はるかに安い。また、一人一回五元の受講料で補習授業を行う学校も少なくない。その結果、名門中学の教師の収入は大学の教授よりも多いし、受験参考書を執筆するベテラン教師の収入はベテラン作家よりも多い。

北京大学などではアメリカ型の経営方法を模索中といわれているが、はたしてアメリカのように大衆化され、「入りやすく出にくい」大学に変わり、「登竜門の夢」が実現しやすくなるのであろうか。